

第20号(2)

(通巻第64号)

平成26年12月

# 特別支援教育 ほっかいどう

Journal of Special Needs Education in HOKKAIDO

A stylized map of Hokkaido, Japan, colored in a vibrant green. The map is centered on the page, with the title '特集' (Special Issue) overlaid on it. The background of the entire page is a light blue gradient.

特集

特別な教育的ニーズのある子どもの  
社会参加・貢献を目指して

北海道立特別支援教育センター

# 特別支援教育ほっかいどう (通刊第64号)

## 特集

### 特別な教育的ニーズのある子どもの 社会参加・貢献を目指して

#### 寄稿

特別支援学校におけるキャリア教育の在り方について  
～共生社会の形成に向けて社会貢献活動を～

北海道雨竜高等養護学校長 播磨正一 …1

#### 実践1

高等学校における社会参加、移行の課題

北海道幕別高等学校 教諭 菊地信二 …6

#### 実践2

地域の一員として暮らす

～最北端の「あたたかな学校」を目指す生徒たちの取組から～

北海道稚内養護学校 教諭 平川亮一 …12

#### 実践3

高等養護学校における社会参加・貢献の取組

～積み木は共生社会への希望の架け橋～

北海道雨竜高等養護学校 教諭 菅野明人 …16

#### 実践4

キャリア教育による就労移行支援の取組

北海道札幌稲穂高等支援学校 教諭 新山 淳 …23

北海道立特別支援教育センターからのお知らせ

Webページとメールマガジンのご案内

…29



## 1 はじめに

特別支援教育がスタートした平成19年4月に「特別支援教育の推進について（通知）」が出されています。その中では特別支援教育の理念が示され、次のような一文があります。

「特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒への教育にとどまらず、障害の有無やその他の個々の違いを認識しつつ様々な人々が生き生きと活躍できる共生社会の形成の基礎となるものであり、我が国の現在及び将来の社会にとって重要な意味を持っている。」

特別支援教育への転換が実施され8年目を迎えました。今年1月には、「障害者の権利に関する条約」が批准され、我が国が共生社会の形成に向けて進む中で、この通知にあるように特別支援教育のもつ意味はますます重要になっています。

さて、近年各学校においてはキャリア教育が推進され、小学校段階から取り組まれるようになりました。また、学校の枠を越え、企業や地域社会と連携した取組が数多く報告されるようになりました。特別支援学校がキャリア教育に取り組むことで、共生社会の形成に向けてとても大切な役割を担うことができると期待しています。本稿では、そのことについて、実践例を紹介しながら述べたいと思います。

## 2 重なり合う二つの定義 キーワードは、貢献

中央教育審議会初等中等教育分科会特別支援教育の在り方に関する特別委員会から出された「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（以下、「中教審報告書」とする。）によると共生社会の定義は、「共生社会とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。」とされています。

これによると、共生社会とは、障害者等が、積極的に社会参加し貢献する社会であるとされています。この報告では、特にこれまではなかった「貢献」の二文字が入りました。

そして、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」によると、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通してキャリア発達を促す教育」であり、キャリア発達とは「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」とされています。

積極的に社会参加・貢献することは、一人一人が、社会の中で自分の役割を果たすことであり、そのことは、自分らしい生き方であり、自立した生き方とも言えます。

このように、共生社会とキャリア教育の目指すところは同じであり、社会と関わり、社会の中で自分の役割を果たすことが大切であるという点です。社会の中で自分の役割を果たすこと…それは社会に何らかの形で貢献することであると思います。

共生社会とキャリア教育の関係については、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の尾崎祐三教育支援部長が、平成25年12月に行われた全国特別支援学校知的障害教育校長会第3回代表者研究協議会でのシンポジウムにおいて、次のように話されています。以下、「全知長会報No.91」より引用し、紹介します。

中教審報告書において、「共生社会とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である」と言っています。社会参加ではなく社会貢献と言っています。障害者が積極的に貢献する社会を目指すことは、これからの特別支援教育に関わっている子どもの育成の方向を示すものだと私は解釈します。

○ キャリア教育と共生社会について

キャリア教育は人々の多様な生き方、在り方を伸ばし、自己実現ができるような形での社会参加を目指す教育であり、共生社会の実現と同じ方向にあると考えています。

○ キャリアの四つの視点（環境・時間性・空間性・個別性）から

地域社会の視点でいいますと、キャリア発達をしていく上で自分は役に立っているんだという実感をもつというのは、地域の方々から「がんばっているね」とか「よくやってるね」とか「作品はすごいね」とかいう言葉を聞くことが、非常に重要です。地域の方々からお礼を言われる。

地域貢献をしてお礼を言われることがあった場合、子どもたちにとってはやる気ややりがいを感じるわけです。そういう場面を作っていくこと。（中略）地域に開かれた学校づくりを更に一步進めて、地域に役立つ、地域に貢献できる学校づくりまでいきますと、そこで活躍する児童生徒たちは、それなりの成果をもらえると私は思います。

### 3 積極的な社会参加と貢献を学校の教育理念に

本校は、共生社会とキャリア教育の理念を学校経営に取り入れ、平成25年度より積極的な社会参加と貢献に取り組んでいます。

(1) 職業学科のよさを活かした社会貢献活動を推進する（これまでの取組をより価値のあるものに発展させて）

社会貢献といえば、どの学校もボランティア活動を挙げると思います。本校も毎年、町内清掃や花壇づくり、老人住宅の除雪に取り組んできました。こうした行事活動的なことも続けながら、本校の教育の中核である作業学習において「社会に貢献する」教育活動を取り入れました。今年度の主な取組は、次のとおりです。

- 木工科～・雨竜町ウッドスタート事業 ・保育所や児童館への木のおもちゃ寄贈
- 農業科～・フラワースマイルプロジェクト
- 工業科～・公園遊具の整備（ブランコと鉄棒の塗装） ・コンクリート施工
- 家庭科～・役場庁舎の窓清掃

(2) 地域との双方向コミュニケーションを推進する

① 地域の方々から激励をいただく「励ましのメッセージ運動」の展開

地域の方々からハガキで生徒への激励の言葉と製品等への感想を書いて投函してもらう取組です。これは、生徒が作った製品や作物、そして貢献活動が地域の方々（消費者）からどのように評価されているかを生徒の目に見える形で伝えたいと考え、実施しました。今年5月の作業製品販売会では、地域の方々から32通のメッセージが寄せられ、生徒の礼儀正しさや真心からの対応に、温かいお褒めの言葉をたくさんいただきました。同時に、作品の感想には、改善へのアドバイスもあり、生徒にとっては次の創作への意欲を高めることにつながりました。また、町内だけではなく、札幌や旭川など遠くから買いに来られている方がいることが分かりました。

② ゲストティーチャーの活用

学校と社会が双方向で交流することは必要なことであり、学校の中に社会を呼び込む取組の一つとして行っています。その道のプロや達人を招き、高い知識や技術などを学ぶことにより、生徒のキャリア発達を促すことにつながります。

### ③ 積極的な情報発信

ホームページを一新し、情報発信のツールとして、生徒の教育活動を日々発信する「雨高養ブログ」を設けました。各学科や学年、寄宿舎からのブログが一日に複数投稿されることも多くなりました。最近では、生徒自身による投稿が中心となっており、情報モラルについての指導をしながら社会を意識した学習を展開しています。また、雨竜町の町内放送において、作業学習製品販売会や学校祭等の案内を直接生徒に行わせてもらっています。

### (3) 貢献する姿勢を生徒指導に取り入れる

社会生活を営むためには、「あいさつ」ができることが大切です。生徒会と寮友会が協力して「あいさつ日本一運動」を推進しています。この運動を通して、貢献とは、関わった人に「ありがとう」と言ってもらえることと生徒にイメージしやすい内容で取り組んでいます。地域の方々から「ありがとう」の言葉をいただいた喜びを忘れず、自分からも「ありがとう」と言える生徒、言ってもらえる生徒にすることを目指しています。

## 4 実践例～「誰のために」「何のために」

### (1) 雨竜町ウッドスタート事業

雨竜町との協同事業で、木工科の生徒が製作した積み木を雨竜町の赤ちゃんや幼稚園、保育所（雨竜町以外にも）にプレゼントする取組です。この積み木は、東京おもちゃ美術館が監修しています。

ウッドスタート事業は、事業趣旨にあるように、生徒が社会に貢献するという役割を果たすことにより自己有用感を高め、キャリア発達を促す取組となっています。また同時に、特別支援教育や障がい者への理解を広め、共生社会の形成に大切な役割を果たしています。

木工科では、この他に雨竜町の木育推進に貢献し、保育所には、木のおもちゃ製作のパートナーとして新製品を提供し、モニターの協力を依頼しています。また、学童保育所にも木のおもちゃを寄贈するなどの協力をしています（図1）。なお、詳細は、本誌の本校実践レポートを参照ください。

### (2) フラワースマイルプロジェクト

このプロジェクトでは、これまで、町内公共施設の花壇に約1000本の花を植えて整備してきました。それに加え、四季折々の花を町内10カ所の施設に寄贈し、町民の皆さんに花を見て楽しんでもらう取組を行っています（図2）。



図1 ウッドスタート事業内容



図2 フラワースマイルプロジェクト広報ポスター

この取組では、花を通じて生徒と地域の方々とのコミュニケーションが広がっています。お届けすると、「わーきれいね」と相手の反応がすぐ生徒たちに伝わります。緊張しながらも、生徒たちは地域の方々とは会話する機会ができます。「励ましのメッセージ」は100%が学校に届けられ、たくさんの感謝の声と改善点（花の名前、育て方等を知らせてほしい等）をいただくことができました。

### (3) 工業科の技と製品の活用

#### ① 公園遊具の整備（ブランコと鉄棒の塗装）

学校前にある平和団地公園の鉄棒とブランコは、塗装が剥がれさびた状態になっていました。そこで、工業科の生徒が公園の鉄棒とブランコを塗装して子どもたちに気持ちよく遊んでもらおうと整備に取り組みました。さび落とし、さび止め塗装、本塗装を行い、整備後はまるで新品のように仕上がりました。管理する町内の会長や子供会の会長が現場まで駆け付け、感謝の言葉をかけてくださり、終業式において、町内会から生徒たちに感謝状の贈呈がありました。

#### ② ゲストティーチャーとのコラボレーション

製品の価値を高める新しい試みとして、ゲストティーチャーを活用した地域活動に取り組んでいます。土建会社の社長をゲストティーチャーに迎え、本校の向かい側にある町営住宅玄関前のコンクリート施工を実施しました。プロの指導を受けたことにより、日常の学習成果以上の素晴らしい仕上がりになりました。生徒のみならず教師も、これまで経験したことのない技法を教わり、感動を覚えたほどです。そして後日、依頼主からの心温まる感謝と激励の言葉が届きました（図3）。

本校が進める社会貢献の教育活動は、町民にも広く知られることとなり、温かい賞賛の言葉をいただいています。雨竜町の広報誌「広報うりゅう」の8月号には、社会貢献に励む生徒の活動が大きく紹介されております（図4）。

### 生徒への励ましのメッセージ

今回、初めてコンクリート平板の施工をさせていただきました。これからも、がんばりますので、生徒への励ましのメッセージをお願いします。

★生徒へのメッセージ☆

今日は素晴らしい出来上がりです。感想は丁寧で、バランスも良く、皆さんの発想の柔軟性もあり協力して頑張った結果だと思います。これからは増え、腕をみがき、お客様の喜ぶ顔を思い浮かべながら、努力をおしまず、はたして、倉庫造りを期待しております。まずは健康第一、いなければ、何もできません。健康第一、これからも頑張ってください。本当にありがとうございました。

★コンクリート平板施工の出来具合はどうでしょうか？ 感想をお願いします。

上記のとおり、デザイン性も良く、幅、奥行のバランスも良く、素晴らしい出来上がりです。感想は丁寧で、バランスも良く、皆さんの発想の柔軟性もあり協力して頑張った結果だと思います。これからは増え、腕をみがき、お客様の喜ぶ顔を思い浮かべながら、努力をおしまず、はたして、倉庫造りを期待しております。まずは健康第一、いなければ、何もできません。健康第一、これからも頑張ってください。本当にありがとうございました。

図3 励ましのメッセージ

「広報うりゅう」8月号

雨竜高等養護学校では、教育方針である「キャリア教育を推進し、地域・社会との連携を深めた実践の充実」に基づき、様々な活動が行われています。7月1日には作業学習のひとつである窓清掃を通じ地域社会に貢献しようと、家庭科の3年生11名のより役場庁舎の窓ふきボランティアが今年初めて行われました。作業前にはA組宮崎乙栄さんの「安全に気を付けて頑張ります」という言葉で作業を開始。専用の道具を駆使し、2時間半ほどをかけて窓ガラスを一枚一枚丁寧に磨き上げていきました。7月22日から23日にかけては、工業科の1、3年生17名により、養護学校前の平和団地内にある公園遊具



地域・社会との連携を進める雨竜高等養護学校  
地域貢献を通じて人間性豊かで社会に自立や参加ができる生徒を

### 地域社会に貢献する喜びを実感



のペンキ塗装が行われました。遊具のサビを電動工具などで丁寧に削ったあと、さび止めを塗り、その上から新しくきれいにペンキが塗られました。7町内の本家町内会長は「公園が明るくなりました。子どもたちも喜んでくれる」と思いま

す」とお礼の言葉を述べていました。7月23日には、木工科の制作による木の車3台が児童クラブに贈呈されました。

おもちゃなどの収納ケースとしてだけでなく、実際に乗って動かせるという優れたもので、さっそく子どもたちが楽しそうに乗って遊ぶ姿を見て、生徒たちは地域社会に貢献する喜びを実感していました。

図4 町の広報誌に「貢献」の文字

## 5 社会との関わりをもう一歩進めて

本校の実践から、社会貢献は次のような教育効果があると感じています。

- 意欲、自己有用感を高める（内発性と外発性の両方から動機付けをする）
  - ・ 内発性：目的が明確であり、赤ちゃんや子どもたち、そして町民のために。役立つことへの使命感と責任感を養うことができます。
  - ・ 外発性：いろいろな立場の方や地域の人々から「ありがとう」「頑張ってるね」と言われ、褒められ、励まされることで、貢献してよかったと感じることができます。
- キャリア発達を促す  
キャリア教育で大切にしている「なぜ」「何のために」行おうかが明確であることから、生徒自身が、意味付け・価値付け・関連付けすることを比較的容易にできます。生徒が主体的に取り組むようになり、学習への姿勢にも変化が見られます。
- 地域社会から評価が得られる  
これまでの販売活動だけでは得られない感謝や励ましの声等が生徒に届くことにより、外部からの評価が生徒へフィードバックされ、自己を振り返ることができ、事後学習に生かされます。

また、地域の新聞や町の広報誌に取組が掲載されることで、地域の特別支援学校の理解に繋がるとともに、生徒が活動に自信をもつことができます。このように社会貢献の活動を通して、生徒と社会が共によい成果を共有することができるのです。キャリア教育の基本要素である「環境との相互作用」と「環境開発」がここに含まれています。

キャリア教育は、何か特別なことに取り組むことではありません。本校では、まず、これまで進めてきた教育活動を「より意味のある、より価値のある内容」にするために見直しを図りました。そして、見直しの視点として「社会貢献」を挙げることにしました。「貢献」には幅広い内容が含まれています。それぞれの学校に、それぞれの児童生徒に合った貢献を創り出してほしいと思います。

本道では、キャリア教育・職業教育の取組として、職場や施設等に一定期間働く体験をする現場実習が実践されてきましたが、長期間にわたって週1回程度職場等で働くことで、企業等と学校が協働して生徒のキャリア発達を促すデュアルシステムを取り入れる学校が見られるようになりました。

昨年開校した北海道中札内高等養護学校幕別分校では、2年目を迎えた今年から2年生がコース制となり、デュアルシステムコースの生徒が週の1日は企業での実習に就いています。また、今年開校した北海道美深高等養護学校あいべつ校では、協力企業との連携協議会が発足し、学校と企業が一体となった取組を進めています。この取組は10月から始まっており、新入生全員が毎週火曜日に企業での作業学習に取り組んでいます。両校とも取組が始まったばかりですが、一人一人の社会的・職業的自立に向けて成果が得られることを期待しています。

これらの取組のように、特別支援学校の児童生徒が、地域の一員として積極的に社会と関わり、自己の役割を果たしていくことがキャリア発達を促し、生徒自身が自立した生き方を考えることにつながります。それは同時にインクルーシブ教育が目指す共生社会の実現に、有効な役割を果たすこととなります。

特別支援学校は、キャリア発達を支援する視点から、これまでの取組をより価値のあるものに発展させ、社会貢献などの積極的な社会との関わりを、もう一歩前進させていきたいと思っています。



## 高等学校における社会参加、移行の課題



北海道幕別高等学校【木村 誠 校長】  
教諭 菊地 信二（特別支援教育コーディネーター）

### 1 はじめに

幕別町は、帯広市の東に隣接する約1.2万世帯、人口約2.7万人の町です。幕別地区、札内地区、忠類地区の3行政地区に区分され、その人口のほとんどは帯広に隣接する札内地区に集中しています。本校は幕別地区に位置しています。本校の近くには幕別小学校、幕別中学校がありますが、2年後にはすべての学年で1学級となり、子どもが減少している地域にあります。

本校は、かつて募集定員160名（学級）の普通科高等学校でしたが、現在、全校生徒が118名の小規模校となりました。平成25年4月に北海道中札内高等養護学校幕別分校（西村泉校長、産業総合科、全校生徒20名）が同一校舎内に設置されましたが、同年本校は開校以来初めて1学級となってしまいました。平成26年度入試では2学級募集が復活し、入学生60名2学級を維持することはできましたが、平成27年度入学生は十勝管内全体で6間口相当の生徒減が見込まれ、入学生の確保は大変厳しい状況にあります。人口が集中する札内地区には4学級相当の私立高等学校もあり、学級減とそれに伴う教職員の削減は、教育環境に大きく影響するだけに2学級は何とか確保しなければならないと考えています。

### 2 「希望進路の実現」は高等学校の教育課題

筆者は、本校において、平成21年度より特別支援教育コーディネーターに指名され、平成23年度より進路指導部長となり、兼務して今年で4年目になります。平成22年度以前は、本校を卒業した生徒の2割以上が無業卒業（進学も就職も決めないで卒業）でした。5、60名の卒業生のうち、実に14、5名が無業卒業でした。多いときには学年4学級時に40名を越える無業卒業者がいました。当時は、学力や基礎的な生活習慣の習得に課題がある生徒が多く、「進路指導に従わない」「指導を拒否する」生徒の存在が大きく影響していたと考えられています。

ここ数年、求人倍率が改善の兆しを見せ、全道、とりわけ十勝管内の就職内定率も向上していますが、十勝管内の求職者（ハローワークの紹介を希望する）数は、毎年3月当初から卒業時までの間に100名近くが減少しています。その内訳としては、途中で進学に希望進路を変更する生徒や公務員に合格する生徒はまれで、就職活動に1、2度挑戦するも諦めてしまう生徒、「ゼロ回受験」のまま「もういい」と全く活動しなくなる生徒もいます。さらに、未就職のまま4月を迎える生徒は徐々に改善はされつつも、平成25年度は希望者全体の5%相当の40名でした。このような生徒は資料統計上の対象から外れていき、指導の手が届かなくなっていくように思います。そのような生徒は、一般に「その他の進路」に分類される生徒ですが、その存在がとても気掛かりと考えています。新規学卒就職を逃すとその後正規のルートに乗って就職することは難しくなり、若者・青年の抱える課題や困難は更に増大することになります。

本校の進路方針の一つに「一人も置き去りにしない。見捨てない。」があります。過去2年の就職希望者は、平成23年度（卒業生38名中）21名、24年度（同51名中）22名、25年度（同48名中）30名で、

## ◆特集・実践 高等学校の取組◆

希望者全員の就職内定を実現させてきました。それは、進路指導部のみならず、担任を中心とする学年団の取組が、それまでの進路指導と大きく質的に転換を図った成果と考えます。

まず、「働くことを通して、積極的に社会参加する生徒を育てる」という大目標を掲げ、進学希望生徒へも、「『いつかは働く』という願い」を抱かせ「『働きたくない』『決めたくない』を認めない」進路指導を徹底し、浸透させてきました。実現のための第一歩として、平成23年度に第3学年が6月に行う5日間のインターンシップ（就業体験活動）を提案し、実施しました。「実体験が働くことへの憧れをつくる」との考えの下、当たり前的一生懸命働き、額に汗する大人の姿に触れることで、生徒に「こんな職場で働きたい」「この人たちの下で働きたい」という思いを膨らませるよう働きかけました。本校の生徒にとって、働くことへの憧れをもたせることはとても有効でした。

全日制普通科高等学校といえば、どこも「進学重視型」の高等学校であり、見方を変えれば、今ある高等学校のシステムの中で「最も働くことから遠い距離にある高等学校」といえます。それにもかかわらず、本校の生徒は、毎年半数近くの生徒が経済的な理由（消極的理由）で「就職」希望です。そこには特別な教育的支援が必要な生徒も含まれています。高等学校のカリキュラムが、半数を超える生徒の教育的ニーズに応えられていない現実を直視し、「総合的な学習の時間」を活用することでインターンシップを実現させました。一般的には2年生でインターンシップを行う高等学校が多い中、3年生で行うインターンシップには大きな意味があります。この時期に実施することで、生徒にとっては、その後の進路活動にちゅうちょなく突入していく絶好の機会となり、自らの進路と向き合う重要なきっかけとなっています。平成23年度卒業の生徒が最後に就職を決めたのは、卒業式から1ヶ月経った4月のことでした。働く実体験は、生徒に就職への意欲と何度も挑戦する強い心を育みました。そして、続く学年の生徒や学年団は、「自分たちも進路実現100%を目指す」「年内に進路を決める」と高い目標を掲げ、健闘するようになりました。このようにして3年連続進路実現100%を実現していきました。表1に示した通り「インターンシップ」の成果は明白です。

表1 インターンシップの実施と卒業生の就職状況

	H21年度	H22年度	H23年度	H24年度	H25年度	H26年度
インターンシップ	3日間	2日間	5日間	5日間	5日間	5日間
就職希望者	38名	41名	21名	22名	30名	16名
就職内定率	57.9%	70.1%	100%	100%	100%	
卒業生数	55名	55名	38名	51名	48名	38名

また、本校の進路指導は「100%」に強いこだわりをもっています。「100%」が続くなら「自分たちも就職できる」という期待や希望が生まれていきます。未内定者が一人でもいたら「もしかして自分は決まらないかもしれない」という不安につながり、自信がもてない生徒たちのモチベーションを低下させてしまいます。「100%」が続くことにより相乗効果を生み出し、3年連続の進路実現100%という結果をもたらしました。本校では、高等学校卒業後、自分の「居場所」を確保することこそが最も重要な教育課題となっています。

### 3 「進路実現 100%」は高等学校の特別支援教育が目指す目標

本校は、「生徒には多様な教育的ニーズがある」を教育の前提に据える高等学校でありたいと考えています。中学校卒業後、98%の生徒が高等学校へ進学しています。当然ながら、高等学校には特別な教育的支援の必要な生徒の存在を前提とした教育の準備が求められます。障がいの有無にかかわらず、個々の生徒が抱える様々な困難や教育的ニーズに目を向け、必要な支援を考え、どのような形で社会参加させられるのかということを検討しなければなりません。卒業後の進路が決まらないのは生徒や保護者に問題があるのでしょうか、それとも、学校や教員の力不足にあるのでしょうか。従来は、

## ◆特集・実践 高等学校の取組◆

「結果に責任は取れない」として、進路活動は自己責任であり、生徒や保護者が決めた進路に「駄目出し」することもなく、「積極的提案」することもタブーとしてきました。もちろん、生徒の内面に踏み込むような指導は消極的だったように思います。しかし、在籍する高等学校や担任、進路指導担当の教員は明らかに生徒にとっての環境要因であり、これらの環境要因によって個々の進路が拓かれるか否かが決定しているのも事実です。担任が一人一人の生徒やその保護者と向き合い、どのようにして進路実現を図るのか、具体的な戦略をもって指導に当たることこそ、高等学校の特別支援教育には大切なことです。

平成23年度から、第3学年全員に5日間のインターンシップを実施してきました。まず、四者面談で丁寧な聞き取りとともに必要な情報を提供して、その後の進路を見据えたインターンシップを検討しました。従来、本校のインターンシップの期間は2日間でした。高等学校にインターンシップが義務化され、本校も実施しなければならなくなったとき、教員間では「うちの生徒をお願いできるのはせいぜい2日間」という見方が大半を占めました。しかし、その2日間さえ、先方に迷惑をかけたか勝手に休んだりする生徒もいて、受け入れてくれた事業所に多大な負担をかけていました。それをあえて5日間に拡大させた理由は二つあります。一つは「2日程度では引き受けても効果は期待できない」という企業側の声が多くあったことと、もう一つは前任校（農業科昼間定時制高等学校）での5日間の取組の効果に確信を得ていたことです。生徒に目的を理解させるのに「なぜ5日間なのか」ということを丁寧に説明しました。生徒や保護者の意向を聞き取り、地元の北海道中小企業家同友会や関係機関の協力を得ながら、生徒の希望に近い事業所の確保に努めました。あわせて、「一人一社」、「一日6時間以上」と「週30時間以上」を基本として依頼することで、可能な限り一般就労に近い条件での実習と取組の個別化を実現させました。そのために、保護者会を開き、丁寧な説明と具体的な協力をお願いしました。生徒には毎日、日誌を付けさせ、保護者と事業所担当者にはその日誌を連絡ノートとして活用いただけるようお願いしました。報告会は保護者や事業所、関係機関にも案内し、実習の成果を共有しました。5日間のインターンシップは初めての試みでしたが、これらの取組により、大きな成果を得ることができました。平成26年度の報告会では、1、2年生全員が参加し、3年生の報告に耳を傾けました。「来年は自分たちもここで報告する」という見通しをもたせる狙いがありました。この4年間でインターンシップの取組は大成長を遂げました。

この5日間のインターンシップは高等養護学校の「現場実習」を見習っています。筆者が初任から12年勤務した高等養護学校で、一般就労を実現させるために効果を発揮していた「現場実習」を高等学校の教育にも導入したのです。前任校の定時制の生徒たちの進路指導にも特別支援学校での「現場実習」は効果的でした。可能ならば月単位での実習に取り組みせたいところですが、高等学校のカリキュラム編成上の制約もあり、いまだに実現できていません。また、働く経験だけでなく、期間中「なぜ、働かなければならないのか」という生徒の疑問に答えてくれる大人との対話にも期待し、受入れをする事業所にその旨も依頼しました。職場の確保はさほど難しいことではありませんでした。しかし、受入れを依頼する事業所はどこでもよいわけではなく、対象生徒に必要な効果が十分期待できるよう、事業所に関する情報を収集し、実習に適切な環境があるかどうかを入念に調査することに時間を費やしました。一般に高等学校の生徒のアルバイト経験は社会勉強と言われますが、アルバイトをすることで間違った労働観や金銭感覚を身に付けている生徒も少なくありません。また、アルバイトをしたくても雇ってもらえない、雇ってもらえたとしても仕事が続かない生徒も多くいます。それだけに、しっかり働く大人や事業所の存在と、そこでの体験実習はとても重要になります。生徒の教育的ニーズを考え、失敗経験が活かされない生徒について、地元の障がい者就業・生活支援センターに情報提供を求め、紹介された事業所で実習を行ったケースもありました。インターンシップは、単なる体験活動ではなく、高等学校卒業後の進路にしっかり向き合わせる個別の課題学習そのものといえます。働くことを通して、社会参加することに直結した活動になっていることが重要だと考えます。

## ◆特集・実践 高等学校の取組◆

早期離職の問題もありますが「辞める前に上司に相談する」「自分一人で辞職を決めない」「困ったときに助けを求める大人を確保する」ことの必要性を学校教育終了までの間にしっかり学んでおくことで、社会生活上の困難から回避できるようになってほしいと思います。本校が荒れていた頃は生徒と教員、保護者と学校の関係は決して良好であったとは言えませんでした。それゆえに、進路決定の時期までに保護者と学校が信頼関係を築くことがとても重要です。

### 4 高等学校でもできる特別支援教育

平成25年度校内研修会で「学びの前提となる力」について、「発達障害と向き合う」（竹内吉和著、幻冬舎ルネッサンス新書、2012）を参考資料として研修を行いました。本校には、入学前には不登校だった生徒や学ぶことに対して初めから諦めて、自信を喪失したまま入学する生徒が多くいます。そして、高等学校に来て初めて「分かる」喜びを実感する生徒も多くいます。小・中学校と9年間の義務教育での学びが積み上がっていなかった生徒に対し、学ぶことに向き合わせるのが難しいと感じています。このような生徒たちの状態を理解するための研修会でした。

以下、研修した内容を抜粋し、掲載します。

学習の最低限の能力は「聞く力」、つまり「聴覚的短期記憶」の問題であり、聴覚的短期記憶の弱さがあると、学校という学力を習得する場へ主体的に参加しようとする気持ちが著しく低下し、言語活動が中心の教師（高等学校では一般的）の授業や他の生徒とのコミュニケーションを前提とした授業への参加が困難となります。「聞く力」の弱さをもった生徒にとって、音声言語だけの授業は苦痛でしかなく、この状態が続けば、授業に参加できない状態が生まれ、「学習性無力感」をもつこととなります。不登校まで行かなくても、学校が面白くない状態となって、居眠り、離席、授業妨害等となって現れます。学力のつまずきから社会性の学びの場や機会を失い、友人関係からの逃避が起こり、長期にわたって社会性の成長に悪影響を及ぼすことになるのは必至です。社会性を学ばせるためには「聞く力」を支援しながら、常に「予測する力（この先どうなるのかが分かる）」を育てる必要があります。「聞く力」を支援すれば学習の苦痛を回避し、達成感が生まれてくる環境が整います。教師や保護者、支援者は「褒めて育てる」ことを基本とすると、対人関係なども「なんかうまくいきそう」という期待感や自信が湧いてきて、挑戦しようとする力が出てきます。教師に褒められる体験や他の生徒に認められる経験を積むことで学習へのモチベーションは飛躍的に向上し、回復します。つまり、学ぼうとする意欲を高めることが「推進力」を育み、不安の増大化を阻止するのに役立ち、「なんかうまくいきそう」という感覚を身に付けることで「反社会性の進行」を阻止できるのです。

教師が自身の認知特性を知り、自分とは違う認知特性の生徒の存在を受け止めることで授業は飛躍的に改善します。聴覚的短期記憶の弱い生徒への配慮も授業改善につながります。教師の説明の時間を短縮し、生徒同士のやりとりを保障するだけで教師はゆとりをもって生徒の学びを観察でき、新たな方策を講じることができるのです。

高等学校には、同一課程、同一評価、同一基準が歴然として存在し、それが意味、高等学校という教育システムの秩序を維持している背景にもなっています。その決められた枠組みからはみ出してしまう生徒は、特別指導（懲戒指導）の対象となり、その指導を通過しなければ、高等学校生活を確保することは難しくなります。

現在の高等学校の教育やシステムには、どの生徒に対しても同一課程、同一評価、同一基準は必要です。しかし、その指導を越えさせなければ、必要な教育や指導が届かないという現実もあります。越えさせるための「合理的配慮」と「基礎的環境整備」が必要ですが、次から次へと同時多発的に起こるさまざまな問題に指導の手が間に合っていない葛藤に悩む担任や教師は多くいます。

## ◆特集・実践 高等学校の取組◆

本校では、生徒の認知特性の違いに注目して、連絡事項は言葉による説明と掲示による説明の両面から行っています。1年生の数学の授業では、教員を複数配置し、図1～図4に示す生徒へのきめ細かな支援を行うことにより、生徒が自ら学習に取り組もうとする環境をつくり、生徒の苦手意識の克服に効果を上げています。また、不測の事態に備え、授業中の巡回や個別の相談、必要に応じて抜き出し指導を行っています。教員定数の減少や分校設置による教室の不足がある中、生徒へのきめ細かな支援への最大限の工夫と努力で、「高等学校に来て勉強が分かるようになった」と話してくれる生徒も増えました。1年生が入学すると夏休み前までに中学校までの学習内容の復習を行います。学習に向き合う環境をつくるだけで平均点がこんなにも上がるものなのかと驚くほど成果が上がっています。中学校で「できない」「分からない」とされてきた生徒たちの多くは、いかに学びが積み上がっていなかったかということが分かります。小・中学校にはその成長した姿を見てほしいと思います。



図1 教室後方のオープンな個人ロッカー  
(机周りの片付けに役立つ)

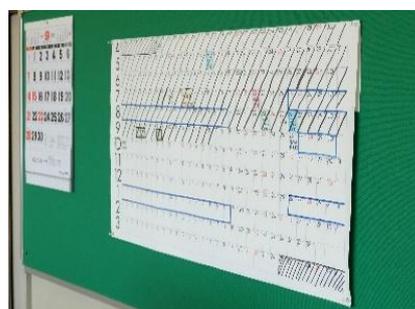


図2 年間カレンダー  
(経過と予定を提示、今までとこれからの時間、とりわけ日数を視覚的に捉えることができる)



図3 教室正面の掲示  
(刺激となるものは一切ない)



図4 時間割  
(一日の学習の流れを提示)

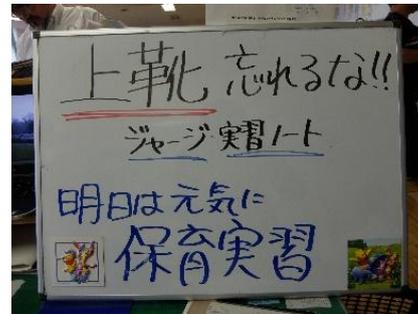


図5 連絡ボード  
(朝の連絡を聴覚と視覚の両面から入力できる)

平成26年4月、本校は60名の入学生を迎えましたが、特別な教育的支援に関する保護者アンケートを実施したところ、40名(66%)の生徒の保護者から「相談したい」「できれば相談したい」という返答をいただきました。また、入学式の間我が子の姿を見て初めて「大変だ」と気づき、入学式終了後、筆者を訪ねてきた保護者もいました。中学校から引き続いて、学習不振の課題だけでなく、注意のコントロール、多動性、衝動性の課題を抱えている生徒の指導には、担任のみならず生徒指導部とも連携しながら対応しています。

## 5 まとめ

生徒にとって「分かる授業」は教育的支援の一つとして学校が取り組むべき大きな課題です。どの生徒も学ぶことが「楽しい」という経験を積んでほしいと切に願います。それが保障されるなら、生徒と教師、保護者と学校との間に信頼関係が生まれ、自分の将来に希望と期待を抱く若者、青年へと育っていきはらずです。

働くために必要な力を考えるとき、社会に出るまでの間に生徒一人一人の教育的ニーズに応じて、以下の力を育んでいきたいと考えます。

それは、①時間管理能力、②金銭管理能力、③心身の健康と体力、④自己理解とメタ認知、⑤自己肯定感の5つです。「自立」とは、周囲の環境を上手に使いながら、必要に応じて支援が得られている状態であると考えます。生徒が社会に出たときに不適応を起こし、様々な事件や事故に巻き込まれないようにするために、上記の力を是非身に付けさせたいものです。時間を守ることができない、金銭にルーズ、能力は有っても心が折れてしまい自分に自信がもてない等の課題を抱える大人が多い状況をあくまで自己責任としてしまうのではなく、学校教育の課題と考えるべきではないでしょうか。もちろん学校教育ですべてを解決できるとは思いませんが、従来 of 学校教育が行ってこなかったことで生きにくさを作っている状況も多くあると思います。

普通科高等学校とは、水泳競技で言えば本来「自由形」であるべきと考えます。つまりスピードを求めるならクロール、そうでないなら平泳ぎや背泳ぎ、バタフライでよいのです。自分の得意を知り、それで勝負したいと期待を込めて挑戦しようとする若者、青年を育てたいと考えます。障がいがあるからではなく、そこに教育的ニーズがあるから支援するのです。生徒一人一人の教育的ニーズの存在を見極め、必要な手立てを講じ、一人一人違った進路の実現という生徒や保護者の負託に応えることができる信頼される教師、高等学校とならなければならないと考えています。



## 地域の一員として暮らす

～最北端の「あたたかな学校」を目指す生徒たちの取組から～



北海道稚内養護学校【松浦孝寿校長】  
教諭 平川亮一

### 1 はじめに

本校は日本最北端の地、稚内市声問（コエトイ）に位置しています。宗谷管内は利尻島・礼文島の2島に加えて、本校から枝幸町最南端までは往復250kmを超え、片道約2時間半はかかる広大な地域です。

本校がある声問地区は、稚内市のノーマライゼーション推進地区に指定されており、モデル地域として文化的、体育的な活動等の普及・推進を行っています。

また、本校は道北圏の特別支援学校として、宗谷管内と留萌管内北部の2町（遠別町、天塩町）を加えたこの地域のセンター的機能を担っています。

本稿では、その地域の中で、本校の重点目標の一つである「将来を見据え、子どもが主体的に活動できるような地域資源を活用した教育」を目指した学校と寄宿舎の取組について紹介します。



図1 留萌管内



図2 宗谷管内

### 2 本校の概要

本校は、昭和52年4月に小・中学部を設置し、開校しました。そして、平成10年4月に高等部を開設しました。現在は小学部9名、中学部8名、高等部17名、全校児童生徒34名が在籍しています。

本校には、医療的ケアを必要とする児童や肢体不自由がある児童生徒、一般就労を目指す知的障害がある生徒などが在籍しています。また、全校児童生徒の約7割（23名）が寄宿舎を利用しており、基本的生活習慣や社会性の向上を目標に、集団生活を送っています。

### 3 主な取組内容について

#### (1) 総合体験学習

本校高等部では、第1学年から第3学年まで総合体験学習（職場体験）を年2回実施しています。今年度の1回目は全学年を対象に5月26日～30日の5日間実施し、2回目は第1・2学年を対象に9月1日～5日の5日間、第3学年を対象に9月1日～12日の土日を除く10日間で実施しました。年2回の実施にして5年が経過し、福祉事業所はもとより、多くの一般企業の協力が得られるなど、地域社会での理解を高めつつ、実習を進めています。

総合体験学習では、働くことへの興味・関心・意欲を高め、理解を深めること、挨拶など地域の人々と適切に関わること、自分の将来について考えることなどを目標としています。また、本校では高等部第1学年前期から地域社会とつながりをもつことで、地域の方々の生徒理解を進め、円滑に社会生活に適應できるようにしていくことを目指しています。

## ◆特集・実践 特別支援学校高等部の取組◆

総合体験学習の受入れ先は、生徒の様子や希望、出身地に合わせて計画しており、宗谷管内全域に渡っています。高等部としては、継続して進路開拓に取り組むとともに、家庭とも連携し、公共交通機関の利用や福祉サービスの利用のための指導についても取り組んでいます。

地域的に事業所の数が少ないことや交通機関の利便性が悪いことなどから、実習先の事業所や企業数は限られています。しかし、継続して実習を受け入れていただく中で、生徒の能力を理解していただいたり、生徒への対応や指導に慣れていただいたりするなど、生徒理解につながっています。福祉事業所や企業の方たちからは、生徒の将来についても気に掛けていただけるなど、これからも地域との対話を通して、良好な関係を継続していくことが大切であると感じています。

また、この取組がより生徒にとって有意義で効果があるものとなるよう、実習前には、事前指導として、普段の作業学習や日常生活の指導を含めた学校生活の中で、挨拶や着替え、働くことへの意識付けなどの指導を改めて行っています。事後指導では、学習や体験内容をまとめた掲示物を作成したり、全体の場で発表したりするなど、成果を振り返るとともに、更なる意欲喚起につながるよう指導をしています。

学校としては、このような取組を通して、総合体験学習が本人と保護者が進路についてより具体的に考え、選択して行くための対話の機会になればと考えています。

近年、保護者の願いや本人の教育的ニーズにより、地域の中学校から本校高等部に入学を希望する生徒が増えています。高等部に在籍する生徒の実態の多様化から、本校の進路指導においては、福祉事業所の利用、福祉的就労から一般就労まで幅広く、生徒の就労先を考えていく必要があります。そして、稚内市内だけではなく校区内のどの地域であっても生徒がその地域で生活し、社会参加していけるようにするため、道北圏の特別支援学校として、積極的な進路開拓や進路指導の充実を図ることが必要であると考えています。



図3 福祉施設での実習の様子  
(ホタテのミミの選別)



図4 一般企業での実習の様子  
(ガソリンスタンドでの車の窓ふき等)

### (2) 声間海岸清掃

寄宿舎では全児童生徒で、町内の清掃（ゴミ拾い）を年3回行っており、第2回は声間町内会の方々と合同で声間海岸の清掃を実施しています。毎年、町内会の多数の方々とお互いに力を合わせて、きれいな地域を保てるよう取り組んでいます。清掃活動を通して、地域の方と一緒に話をしたり休憩時間にお茶を飲んだりしながら交流を深めています。

近隣には中学校や高等学校がなく、地域では高齢の方の割合が増える中、児童生徒たちがゴミ袋を一生懸命に運び、海岸をきれいにするすることで、地域の方々に喜んでもらえる活動となっています。児童生徒にとっても、自分の力が役立ち、必要とされていることを実感できるよい機会となっています。

また、この取組は地域を清掃するというだけではなく、地域の方からの児童生徒に対する理解がより深まり、町内全体で本校児童生徒を見守り、協力していただける関係づくりや環境づくりに

◆特集・実践 特別支援学校高等部の取組◆

もつながっています。

さらに、清掃活動を通して、高等部の生徒が小学部、中学部の児童生徒の手を引き、積極的に活動する姿が見られるようになりました。これも長年続けてきた成果と言えます。高等部の生徒は、自然とグループのリーダー的役割を務めてくれています。誰かに言われてというのではなく、先輩たちがやってきたことを自然と引き継いでいる様子が見えます。この活動を通して児童生徒が成長し、社会自立に必要な力を育むことを期待して、地域と対話していくことを大切に、今後も引き続き清掃活動を実施していく予定です。



図5 声問海岸清掃の様子



図6 町内の方々と記念撮影

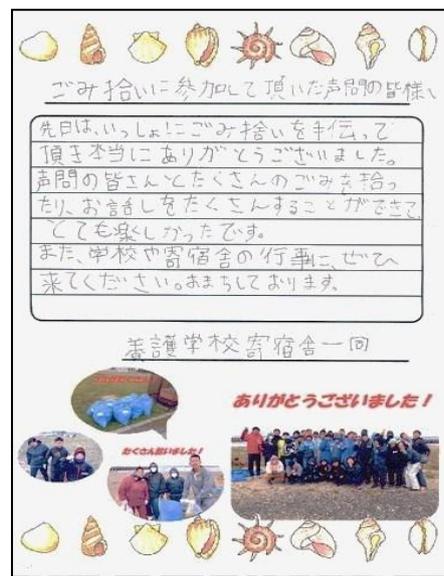


図7 町内の方への手紙

(3) 声問神社祭

地域活動の一つとして、年に一度地域で行われる神社祭では、町内会からの要請を受けて、本校のお店を出しています。地域の施設や小学校、町内会の方々の店と並び、祭りを盛り上げている、毎年恒例の出店となっています。



図8 声問神社祭での記念撮影



図9 高等部生徒の接客の様子

神社祭では、接客で求められるコミュニケーションスキルや金銭の取扱いなど、日々学習で取り組んでいる成果が試されます。毎年、児童生徒たちは緊張しながら、「いらっしゃいませ」と声を掛けるところから始め、お金を受け取ったり、おつりを渡したり、袋に詰めたりするなど、複数ある工程を友だちと分担し、助け合いながら頑張っています。学習では得られない体験ができるため、児童生徒が成長するための貴重な場となっています。店番以外の時間は各自自由に過ごしますが、児童生徒の様子を見ていると祭りを通して地域に溶け込んでいることが感じられます。神社祭を通して、地域の方々による本校の児童生徒への理解が深まるだけでなく、児童生徒

## ◆特集・実践 特別支援学校高等部の取組◆

が普段の学校生活では見ることができないような力を発揮する機会になっています。

### 4 今後に向けて

地域の方々の理解と協力をいただくことで、本校の児童生徒が伸び伸びと地域活動に参加することができています。地域活動を通して、児童生徒には、普段の学校での学習だけでは得ることができない多くのことを学び、地域の方々と対話しながら社会貢献する体験を重ねてほしいと考えています。特別支援教育に理解のある地域で学校生活を送ることができていることは児童生徒にとって幸せなことです。これからも地域と深い関わりをもって、教育活動を継続していきたいと思えます。

本校は、「人々と関わりながら、社会で役割を担う元気な人を育てる」という学校教育目標の下、重点でもある「地域とつながる、特色ある教育活動」を推進しています。学校や寄宿舎の生活で培った児童生徒一人一人の「よさ」やもてる力を育み、地域の一員として求められる役割を果たしていくことができるよう教育活動の充実を図ることが大切であると考えています。

今後は、より地域への貢献を意識した学習や活動を検討する必要があると考えています。現在は町内にある老人福祉施設を毎年訪問し、入所者の方とゲームをして触れ合うなどの活動をしています。今後も一層地域の方とのつながりを深めるなど、対話を通して、清掃や除雪の奉仕活動など、地域の方のニーズを踏まえた創造的な活動についても検討していく必要があります。

本校の教職員は若い世代が多いため、未熟な部分は多くありますが、活気や活力があり、様々なことにチャレンジしようとする意欲もあります。教職員が若いという本校のよさを生かし、生徒と教員も対話を大切に、共に成長しながら新しいことにもチャレンジする教育活動が展開できるよう、努力していきたいと考えています。

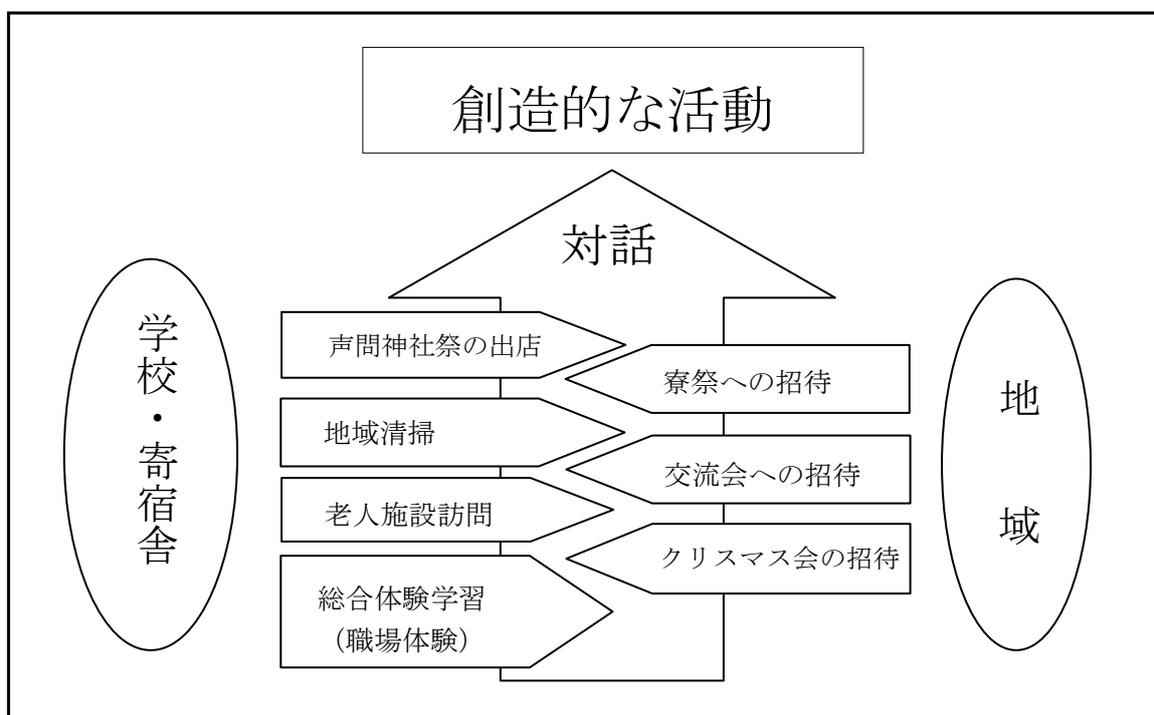


図10 学校と地域の関わり



## 高等養護学校における社会参加・貢献の取組

～積み木は共生社会への希望の架け橋～



北海道雨竜高等養護学校【播磨正一 校長】

教諭 菅野明人

### 1 はじめに

本校は空知管内北部に位置する雨竜町にある、全校生徒149名の職業学科を置く知的障害特別支援学校高等部単置校です。平成8年に公開された山田洋次監督の映画「学校Ⅱ」の舞台にもなった学校で、農業科、木工科、工業科、家庭科、生活園芸科、生活窯業科の6学科から構成され、各学科の特長を活かした製品づくりを中心に学習を展開しています。

そのうち木工科は現在、1年生8名、2年生9名、3年生8名、計25名の生徒が在籍し、2年生を中心に取り組む「雨竜町ウッドスタート事業」のほか、各種木工製品を製造しています。

本稿では、地域社会への貢献の取組として平成25年度から始まった「雨竜町ウッドスタート事業」を中心に紹介します。

### 2 木工のよさ（特長）を活かして…ウッドスタートに至るまで

平成24年7月の「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」の中で、「共生社会とは、これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障害者等が積極的に社会参加・貢献していくことができる社会である」とあるように、社会参加だけでなく、社会貢献が求められています。本校ではそれを受けて、平成25年度に向け地域社会に貢献できる事業を推進するための検討を始めました。

それと同時に、キャリア教育を視点とした教育課程の見直しに取り組みました。木工科では、木の温かさを活かした製品の開発を進めました。完成した製品を地域の保育所で活用してもらい、評価を受けて改善するというモニターの協力を得て、取組を進めました。

生徒はこの取組の中で実際に保育所を訪問し、園児と一緒に製作した積み木で遊ぶことを経験し（図1）、自分たちが製作したものが実際に使われていることを実感することができました。そのことが製作意欲の向上に結び付いていきました。その後、試作した積み木を贈呈したところ、園児たちにとっても喜ばれ、心のこもった折り紙の礼状とメッセージをいただきました。この中で、積み木の製作を通じた社会貢献の原案が生まれました（図2）。



図1 園児と積み木で遊ぶ様子



図2 折り紙の礼状

### 3 雨竜町ウッドスタート事業について

#### (1) 積み木製作の構想からウッドスタート協定まで

保育所のモニター協力を基に家庭用の新作を製作したところ、雨竜町長にその第1号を購入していただけることになりました。製品の意味付け、価値付けのために、雨竜町で生まれる子どもにその積み木をプレゼントしていただけないかと提案したところ、町長から快諾を得ることができました。そして、具体的な協議を経た後に新年度から協同事業として、積み木の製作・贈呈に取り組むこととなりました。

平成25年4月15日に調印式を行い、雨竜町と協定を結んだ協同事業は、東京おもちゃ美術館（認定NPO法人日本グッド・トイ委員会<sup>\*1</sup>）が推進しているウッドスタート<sup>\*2</sup>運動を参考に、その名称を「雨竜町ウッドスタート事業」としました。

「雨竜町ウッドスタート事業」は次の事業を中心に、木育<sup>\*3</sup>を推進する内容となっています（図3）。

#### 雨竜町ウッドスタート事業

##### ・事業A

町内の1歳6か月になる子どもへ贈呈します。  
年に3回の1歳6か月健康診査日に合わせて町教委、町福祉課と連携し贈呈式を行います。

##### ・事業B

雨竜町近隣の保育所や幼稚園に寄贈します。

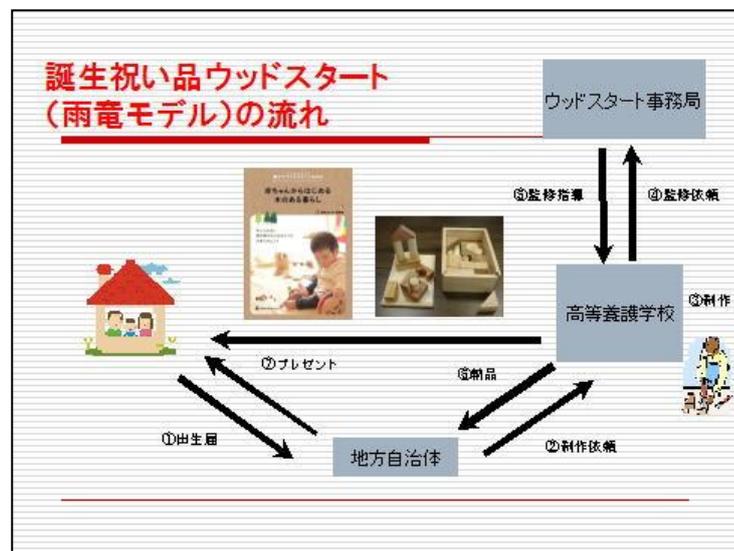


図3 誕生祝い品ウッドスタート（雨竜モデル）の流れ

これまでの製品製作では、販売会で買っていただいたところで終了するものでしたが、積み木の製作と贈呈では、製品を通して作り手と使い手双方のやり取りが生まれ、実際に使用した方からの評価を受けられることとなります。生徒にとって、評価を受け認められることが、自分の社会での役割を認識することに大きく役立ち、製作への意欲の向上にもつながっています。

#### (2) 製品としての積み木

本校製作の積み木はウッドスタートのコンセプトにある地産地消の考えに則り、道産材のセン（ハリギリ）、カバ、クルミを使用しています。材料はこの事業の趣旨を理解いただいた、町内

さらに、この事業を多田東京おもちゃ美術館長（認定NPO法人日本グッド・トイ委員会理事長）に報告したところ、連携・協力をいただけることとなり、製作する積み木の監修を引き受けていただきました。

平成25年7月には雨竜町と東京おもちゃ美術館、本校の三者でウッドスタート協定を締結しています。これは全国の自治体では4番目、北海道では第1号になり、特別支援学校と協定するのは全国でも例のない取組で「雨竜モデル」ともいわれるものとなっています。

## ◆特集・実践 高等養護学校・高等支援学校の取組◆

の建設会社（株式会社池上木工）にお願いし、調達しています。

当初、保育所のモニター協力から生まれた木工科の積み木ですが、製品として販売する以上、一定のデザインや安全の基準を満たす必要があります。機能性とデザイン性及び積み木の安全性については東京おもちゃ美術館（認定NPO法人日本グッド・トイ委員会）の監修・指導を受けるとともに、日本玩具協会からも協力をいただきSTマークの安全基準も参考にして、一般に流通している商品と同等の安全基準を満たすことができました。

また、幼児の口に入っても心配がないこと、簡単な手入れで長い間使っていただけることを考え、家庭で入手しやすいオリーブ油で仕上げ、贈呈のときには手入れの方法を生徒から保護者へ伝えています。



○ 町内の1歳6か月になる幼児へ贈呈される積み木。贈られる子どもの名前と何番目に贈られたかを示す番号が入ります。また、兄弟姉妹の積み木が増えていくことで遊びも広がります。

### \*1 認定NPO法人日本グッド・トイ委員会

日本で唯一の優良玩具「グッド・トイ」の選定機関として1985年に設立されました。おもちゃの専門資格である「おもちゃコンサルタント」の養成を25年継続し、全国に5000人を超える有資格者を育てています。近年は新宿区と連携し、「東京おもちゃ美術館」の運営や国立成育医療センター、順天堂大学と連携する病児の遊び支援も積極的に推進しています。

### \*2 ウッドスタート

平成18年に閣議決定された「森林・林業基本計画」の一環として推進されている木育事業の発展形として位置する国産材の木づかい運動の行動プランです。「木」を真ん中においた子育て・子育ての環境を整備してすべての子どもたちが人生最初のステージを木のぬくもりを感じながら、楽しく豊かに送ることができるようにしていく取組です。東京おもちゃ美術館（認定NPO法人日本グッド・トイ委員会）が全国で運動を推進しています。

### \*3 木育

平成16年から北海道が発信し進めているもので、「木にふれあい、木に学び、木と生きる」取組です。子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むことを目的としています。

## 4 常に生徒が中心に（直接体験の大切さ）

### (1) 積み木の製作～贈呈式

ウッドスタート事業に取り組んだ1年目は町内の子ども19人分の積み木と、保育所用の積み木セット2台の製作に当たりました。その他には、初年度ということもあり雨竜町役場や教育委員会などで事業をアピールするために必要な展示用の積み木の製作にも取り組みました。2年目に

## ◆特集・実践 高等養護学校・高等支援学校の取組◆

当たる本年度は子ども23人分の積み木を製作しています。積み木を製作する中で、生徒たちは取組を本校ホームページのブログを利用して発信し、自分たちの頑張りや気持ちを率直に表現するようにもなりました。



図4 町長と生徒による子どもへの贈呈の様子



図5 製作した生徒と贈られた子どもとの記念撮影

町内の子どもを対象にした第1回目の贈呈式は、平成25年度1学期終業式に合わせ、本校を会場にして行われました。ここでは対象12名のうち参加していただいた8組の親子へ、製作を担当した生徒が雨竜町長、東京おもちゃ美術館副館長、本校校長と一緒に積み木を手渡しました（図4、5）。

学校で贈呈式を行った意図は、次の二つがありました。一つは全校生徒に木工科での取組を周知すること。もう一つは、生徒自身に自分たちが社会の役に立つのだと知ってもらうことです。

贈呈式当日は報道各社が取材に訪れていましたが、木工科の生徒は緊張しながらも無事に贈呈を終えることができました。贈呈式後に取材を受ける生徒もおりましたが、その表情は誇らしげなもので、取組について自分の言葉で説明することができました。後日、ニュースや新聞で自分たちのことが報道されたことも生徒にはとても貴重な経験であり、自信につながったものと思います。

積み木の製作について、期待や不安を率直につづった生徒発信のブログを一部紹介します。

### ○25. 7. 23 いよいよ、明日は、ウッドスタート贈呈式

今日は、1学期最後の作業です。今日は、つみきの、最後のしあげです。

みんな、最後に、ていねいに、はこづめをして、しあげました。

いよいよ、明日は、ぞうていしき。子どもたちにわたします。

明日、おたのしみに！

明日の、ぞうていしき、わたしも、ステージのうえで、

わたすやくになりました。きんちょうします。

（文：2年木工科A）

### ○26. 6. 13 もう少し！

いよいよ（今年度）第1回の贈呈式が来週までせまりましたっ！

作業では子どもたちにつみきを渡す練習をしています。

保護者の方におくる言葉を考えています。

子どもたちが喜んでくれるように渡したいです!!

（文：2年木工科B）

### ○26. 6. 18 無事終わりましたっ

贈呈式が終わりました。

はじめは、泣いている子もいたりしましたが、

つみきをわたすと笑顔になり、喜んでくれていました。

可愛い笑顔を見ると、なんだか嬉しくなりました。楽しく使ってほしいです☆

（文：2年木工科B）



## ◆特集・実践 高等養護学校・高等支援学校の取組◆

### (2) 北海道知事からの激励 ～ 励ましが自信に

初年度に積み木の製作に携わった生徒たち17名は、平成25年11月15日に高橋はるみ北海道知事を表敬訪問しました。そこで雨竜町ウッドスタート事業の報告を行い、北海道知事に積み木をプレゼントしました。

高橋知事は、木との触れ合いで始めるウッドスタート事業の意義について、「この事業に取り組まれていることを知り、とっても嬉しい気分になりました。」と話され、また、北海道は全国の森林の約4分の1あることや、北海道が進めている木育についても紹介されました。

そして「皆さん方が心を込めて作られた積み木で赤ちゃんが遊ぶことによって、北海道が世界に誇る木の文化を、人生の初めに味わえることは、本当に素晴らしいことです。地域を挙げた素晴らしい取組であり、教育です。」と最大の激励をしていただきました。

その後、積み木を一つ一つ手に取りながら、「これは一人で作るのですか？みんなで作るのですか？」「作るのに何日位かかりましたか？」「くり抜くのは機械ですか？」「どういうところに苦労しましたか？」などと質問され、「心がこもって、よいですね！」等と終始和やかに懇談していただきました。

記念撮影中も、「かけ声はチーズとか、積み木〜とか。」「木はどこから取って来ますか？・・・自分で森から切って来るのではないのですね。」と生徒たちを笑わせてくれました。

表敬訪問したことは生徒にとって、取組を認めてもらえる機会となり、大きな励ましになりました(図6)。



図6 北海道知事表敬訪問の様子

## 5 地域社会へ貢献することの効果

### (1) ウッドスタート事業初年度

ウッドスタート事業に取り組んだことで最も大きく変わったことは、生徒自身の意識です。なぜ変化したのかを考えると、この事業は、従来から行われてきた作業学習と同様に、ものづくりを通じた学習であることに変わりはないのですが、これまでとは違う点が次の二つではないかと考えます。

- ・生徒が実際に使ってくれる様子を生徒が見ることができること、また、「ありがとう」と感謝されたりすること。
- ・製作する目的が分かりやすく、人の役に立つことを実感しやすいこと。

これまでの製品製作は販売会に向けた準備が中心であったのですが、この事業では人とのつながりをより実感できる場面が多く、生徒が「なぜ」「何のために」取り組んでいるのかが分かりやす

## ◆特集・実践 高等養護学校・高等支援学校の取組◆

と思います。そして、生徒が自信や責任をもち作業に臨むようになったことが、何よりも意味のあることであったと感じています。次に紹介する、初年度を終える頃の生徒の感想からも、そのことが伺えます。

### ～ウッドスタートを終えた生徒の感想～

昨年、ウッドスタート事業が始まり、木工科では積み木を作ることになり、忙しい日々が始まりました。リーダーを務めることになり、初めは不安でした。

でも、楽しかったし、自信も付きました。雨竜町の子どものための積み木を作ることによって、私だけでなく、木工科のみんなも自信が付いたと思います。

北海道知事のところまで行かせていただき、大変よい経験をさせていただいたなと思いました。しかも、全国の中で表彰していただき、大変うれしいです。贈呈式では、赤ちゃんも積み木をあげたら、にこにこうれしそうに笑って遊んでくれました。そのとき、私は本当にうれしかったです。頑張った積み木を作ったよかったなと思いました。この学校の木工科に入らなかったら、こんなうれしいことはなかったと思います。木工科に入ったらよかったなと思いました。

これからも、ウッドスタート事業を責任をもって頑張っていきたいと思っています。春からも、どうぞよろしくお願いします。

平成25年度 2 学年通信から

### (2) 今年度の様子～社会への広がり

ウッドスタート事業が2年目に入り、地域や家庭の意識にも変化があるように感じています。初年度は学校や雨竜町教育委員会から、積み木を贈る幼児の保護者へ出席のお願いをしなければいけない状況でしたが、最近は案内を送ると、ほとんどの保護者が時間に遅れずに参加して下さいます。地域の保護者同士のつながりもあり、この取組が浸透してきているようで、プレゼントされる積み木を楽しみにされている様子も伝わってきます。このことも生徒にとって、大きな励みになっています。

また、ウッドスタート事業は地域の方々からだけでなく、木育関係者をはじめ、多方面から関心をもたれ注目されることになりました。報道機関や林業関係の機関誌にも取り上げていただいている中、北海道空知総合振興局の森林普及室から、何か協力することはできないかというお話をいただきました。何度かの打合せを経て、実際に木が育てられている現場を体験する「森林教室」を開いていただくことになり、その中で生徒は森林の役割について話を聞き、森づくりにはどのような仕事があるかを体験し、学びました(図7)。苗木の植樹では、山の堅い土地に苦労してスコップで穴を掘り、やっとの思いで一人1本の苗木を植えてきました。しかし、実際に山で仕事をされる方が一人で一日に300～400本の苗木を植えることを聞き、生徒はいかに大変な仕事であるかを感じた様子でした。また、森づくりに必要な下草刈りや間伐、玉切りといった実際の山の仕事を体験したことで、木材を扱うときに無駄にはいけないとの緊張感が生まれました。



図7 森林教室の様子

## ◆特集・実践 高等養護学校・高等支援学校の取組◆

日頃から木工科の作業学習の中で繰り返し伝えていることがあります。一つは自分の前の人の仕事を大切にすること、もう一つは自分の後の人が気持ちよく仕事ができるよう心掛けることです。また、木工製品を作る際、貴重な材料を無駄にしないようにと生徒に伝えています。しかし、生徒は自分たちが使っている木材がどのように生産されているのか、自分たちの前に仕事をしている人の姿を目に見える形で学習する機会がありませんでした。森林教室は学校の中では決してできない、大変貴重な学習場面であると感じています。同時に、このウッドスタート事業が地域の中だけでなく、各方面へ広がっていることも強く感じています。今後も積み木を介した地域や社会とのつながりを大切にするとともに、生徒にもそのことを伝えていくことが教員の役割であると思います。

### 6 取組のまとめ～積み木を通した社会との関わり

毎年、主に2年生が積み木の製作に取り組み、年3回の1歳6か月健康診査に合わせて贈呈式を行っていますが、最初の贈呈式を終えると生徒の表情が変わってくるのを実感します。積み木を心待ちにしてくれている保護者との会話の中でお礼を言われることや、プレゼントされた直後から積み木を手にとって遊び出す幼児の姿を見ることで「頑張ってたかった」「誰かに必要とされる経験はこれまではなかった」との声が生徒たちから挙がっています。そして、次の贈呈式に向けて、「製作にかける時間がどれだけあるのか」「丁寧に、間に合うように作らなくては」という意識をもち取り組む生徒が増えています。

また、実際に保護者と幼児と一緒に積み木で遊ぶ姿をビデオで送ってくださった家庭があり、木工科の生徒全員で視聴する機会を得ることができました。生徒は積み木を一つ一つ積み上げる幼児の姿を見て積み木のピースの精度が大切なこと、それが幼児の遊ぶ意欲につながっていることを知り、学び、自分の役割や責任を認識できる貴重な機会となりました。このような生徒と地域との双方向でのやりとりが増えていけば、より自己有用感が高まり、社会参加・貢献への意識が育っていくものと考えます。

平成26年2月には、学校関係者と地域・社会や産業界の関係者等が連携・協働してキャリア教育に取り組んでいる先進事例を表彰する「キャリア教育推進連携表彰」（文部科学省・経済産業省による共同実施）で「審査委員会特別賞」を受賞しました。その理由として次のことが挙げられています。

- ・生徒が作成した積み木を、保護者及び幼児等に直接手渡しすることにより、仕事のプロセス（発注から提供まで）、責任及び喜びなどを非常に分かりやすく実感として捉えることができる取組である。
- ・自己有用感をもたせる取組を、学校が社会各者（行政、NPO、企業）と協力して効果的に行うことができ、上手にデザインされた好事例である。
- ・各協力主体にとって、協力のメリットが感じられるような工夫があり、継続性が高い。
- ・教育課程（教育計画）に位置付けて取り組み、次年度に向けて学校と町が事業内容の反省（評価）を行い、次年度の予算を含めた計画を立てている。
- ・今後、地域の多くの人々と継続的に関わり、日本のモデルになる教育を進めていただきつつ、特別支援教育が進めるインクルーシブ教育の目指すところである、共生社会の形成に有効な役割を果たすことについても期待している。

今後もこうした評価や期待に応えられるよう、学校と社会との関わりを大切にしながら指導を展開していきたいと考えています。



## キャリア教育による就労移行支援の取組



北海道札幌稲穂高等支援学校【松下高広校長】  
教諭 新山 淳

### 1 はじめに

本校は、平成23年4月に札幌市手稲区稲穂に開校しました。「夢 心 力」を校訓とし、「夢に向かって 心豊かに 力一杯躍動する生徒を育てる」を学校教育目標に掲げ、寄宿舎を置かない自力通学型の単置の高等支援学校として、特別支援教育を展開しています。平成26年3月に、第1期生が本校を巣立ち、初めて卒業生を輩出した開校4年目の学校です。

本校の就労移行支援の取組は、キャリア教育の視点を取り入れ、少しの工夫をすることで、その取組の意義を生徒と保護者、教師が共有でき、学習効果が高まると考えています。本稿では、本校の在学中と卒業後の就労移行支援における取組を紹介します。

### 2 在学中の就労移行支援

#### (1) 現場実習

高等支援学校における現場実習は、卒業後を見据え、生徒が社会参加・自立を目指す上で欠かすことができない取組として、すべての高等支援学校で実施されています。各学年の現場実習の目標は、学年目標から下りてきていますが、事前学習の際は分かりやすいキーワードで提示しています。図の2年生のキーワードは「通う」「聞く」「気づく」です（図1）。テーマをより身近な言葉で提示することで、生徒が目標を確認し、目的意識を高めながら実習に取り組むことをねらっています（図2）。また、3年間の現場実習の流れと社会人になるまでのつながりは、各学年の事前学習ごとに確認し、その都度、見通しと意欲をもたせています（図3）。

**2年生 前期現場実習**

- ・将来の進路先を意識した実習
- ・自宅から一人で通う(単独実習)
- ・1年生の時とちがう職種の体験  
(いろいろな仕事がある)

**「通う」「聞く」「気づく」**



図1 現場実習のキーワード

👉 今回の現場実習のポイントは・・・

**気づく**

現場実習中に気づいたことはどんどん積極的に取り組みましょう。そして、現場実習後はしっかり振り返り、自分の良いところや弱点に気づき、将来につなげていきましょう。

図2 キーワードの具体的な提示

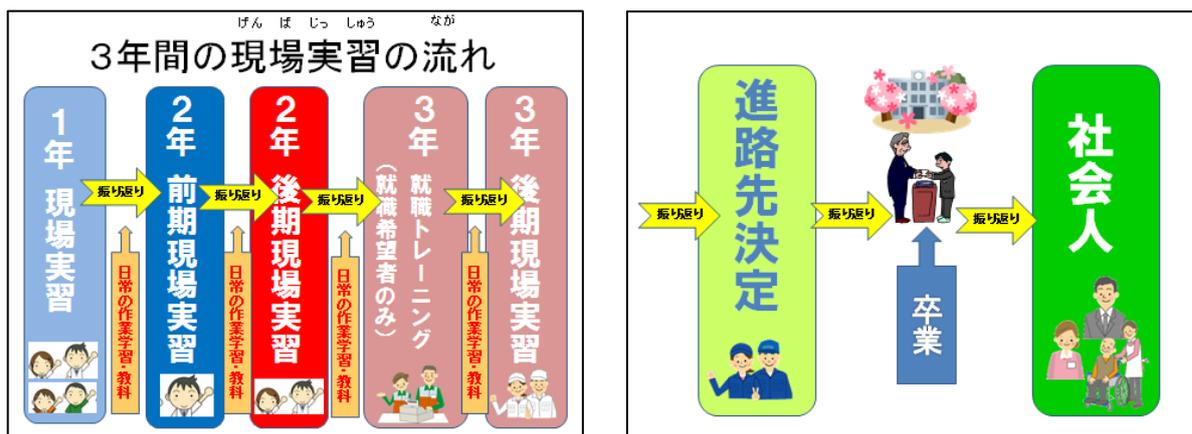


図3 3年間の現場実習と社会人になるまでのつながり

1年生の現場実習（7日間）は、週をまたぐ日程に特徴があります。実習期間中における土曜日と日曜日(仕事の前日)の過ごし方を経験することで、次の日の仕事を考えて余暇活動の量と時間帯を意識して実践する機会となります。これは、社会人の働く生活を想定したもので、1年生で体験することにより、2年生以降の現場実習、また、卒業後の生活に生かされると考えています。

2年生の前期現場実習（5日間）は、すべての生徒が自宅から実習先へ単独で通勤します。これは、一般就労、福祉的就労を問わず、卒業後は、必ず自分で通勤しなければならない状況を想定しての実習形態です。後期現場実習は、3年生の就労前提実習を想定して、一般就労志望者は前期に続き単独実習を行い、福祉的就労志望者は、学校から手稲地区の職場で、教職員の引率による実習を行います。生徒は、この後期現場実習の後から3年生になるまでに、後述の「(2) 個別の教育支援計画を活用した『生徒面談週間』『保護者懇談』『進路説明会』（26 ページ）」の取組を通じて、一般就労か福祉的就労かの選択を行います。

3年生の6月には、2年生の後期現場実習を受けて一般就労志望者は、9日間の就職トレーニングを行います。この就職トレーニングは、生徒に成果と課題を確認するとともに、自信を高めて9月の就労前提実習につなげることをねらっています。9月の就労前提実習は4週間行い、卒業後の進路先を確定させます。福祉的就労志望者は2週間を基本に実習を行います。



図4 現場実習の様子

【現場実習の事前・事後学習】

現場実習の取組は、実習日以外に事前・事後学習の期間も含まれます。実習をより効果的なものにするためには、キャリア教育の視点を入れた事前・事後学習の充実が必要となります。キャリア教育の視点を入れるということは、生徒のキャリア発達を促すためにどのような取組をしているかということになります。実習に行く前に生徒が抱いている気持ちと、実際に経験した後でどのような内面の変化があったかを確認することが大切であり、事前・事後学習では一貫して生徒と教師の「気づき」を促すことを取り組んでいます。これまでの3年間は、「振り返り」に時間をかけて丁寧に取り組むことに心掛けてきました。

現場実習の事前・事後学習は、教科「職業」と「総合的な学習の時間」の時間において取り

◆特集・実践 高等養護学校・高等支援学校の取組◆

組んでいます。卒業生が一般企業や福祉事業所で働くために必要な力を考えたとき、特定の仕事をを行うための知識・技能と、職種等に関係なく社会人として必要な力に大別されます。本校の「職業」では、学習指導要領の目標前半にある「勤労の意義について理解する」の部分重視し、どの職業にも必要な社会人として働く上で必要な力、すなわちワークパーソナリティの育成に努めています。ワークパーソナリティとは、職業人としてすべての職種を遂行する上で、必要となる力のことです。例えば、働くことへの興味、関心等の働く動機付けや働き方のイメージ、挨拶、返事、報告や協調性、ルールの遵守といった職場に受け入れられる人間性、障害受容を含めた自己理解、ストレス耐性等が挙げられます。「職業」で日常培っているワークパーソナリティを、現場実習、事前学習で更に培い、現場実習では実際の仕事を行う上での知識と技能を培い、事後学習では実習を振り返る自己評価と実習先の評価を照らし合わせることで、自分の成果と課題を含めた成長を客観視し、自己効力感を高めて次のステップへつなげることをねらっています。

このように、教科と現場実習事前・事後学習を密接に関連付けて、ワークパーソナリティを含めた生徒の働く力を高めています。

また、関連付けという点においては、現場実習の前後のつながりを重視しています。例えば、2年生の後期現場実習の事前学習は、前期現場実習と日常の作業学習の振り返りに始まり、以降の目標等を考える事前学習を展開します。3年間通して行う現場実習を学年ごとに単発で進めるのではなく、意図的に前後のつながりをもたせ振り返りを行うことで、生徒の進路実現に結び付く発展的な現場実習が期待できると考えます（図5）。

**前期現場実習を振り返ろう！**

後期現場実習が始まる前に、まずは前期現場実習の経験を振り返りましょう。

**【実習先と作業内容】**

作業内容には、実際にどんな仕事をさせてもらったのかを思い出して、詳しく書きましょう。

実習先	
作業内容	

**【前期現場実習の目標について】**

前期現場実習の目標は、どんな目標でしたか？


目標は達成できましたか？どんな反省をしましたか？


**【前期現場実習を終えて】**

前期現場実習が終わったあと、どんなことをがんばろうと思いたか？


現場実習が終わってから、学校生活の中で自分ががんばってきたことや、変わったところ、成長したと思うところを書きましょう。


☆前期現場実習について担任の先生から話を聞き、参考にしましょう。  
(巡回の時の様子や実習先からの評価など)



図5 振り返りから始める現場実習の事前学習(2年生後期現場実習学習帳より)

(2) 個別の教育支援計画を活用した「生徒面談週間」「保護者懇談」「進路説明会」

本校の個別の教育支援計画の特徴は、「本人・保護者の意向」を本人、保護者に記入、更新してもらい、常に最新のニーズを把握する点と、個別の移行支援計画が含まれる点です。「本人・保護者の意向」は、①入学1年後、②卒業後（3年後）の希望を、入学前と年度修了時に、本人と保護者に記入してもらいます（図6）。この「本人・保護者の意向」を中心に置き、生徒一人一人の長期目標（本校では重点目標）を考え、生徒のキャリア発達を支援する学習活動を展開します。学年進行に伴い、個別の移行支援計画の記入も進め、将来作成する「個別の支援計画」や「サービス等利用計画」の礎となる個別の教育支援計画を作成していきます。個別の教育支援計画は、生徒面談週間と保護者懇談で活用します。さらに、保護者懇談と進路説明会を組み合わせることで、生徒にとって望ましい進路を実現することを目指しています。

(様式2)

### 個別の教育支援計画

氏名	性別	学校名	北海道札幌稲穂高等支援学校
作成者		作成日	平成 26年 月 日 ( . . . . . 修正)

● 本人・保護者の意向

本人の意向	<input type="checkbox"/> 今年1年間の自分(1年間でこんな自分になりたい、こんな生活がしたい) . <input type="checkbox"/> 卒業後の自分(卒業後はこんな自分になりたい、こんな生活がしたい) .
保護者の意向	<input type="checkbox"/> 今年1年間の意向(1年間でこんな姿になってほしい、こんな生活をしてほしい) . <input type="checkbox"/> 卒業後の意向(卒業後にはこんな姿になってほしい、こんな生活をしてほしい) .

● 重点目標

重 点 目 標

図6 個別の教育支援計画「本人・保護者の意向」と「重点目標」

○ 生徒面談週間（年に3回設定）

生徒と教師が共に生徒の成長を確認する大切な場面となります。面接では、主に、個別の教育支援計画の重点目標や通知表の評価、進路希望の確認、様々な悩みや困りの聞き取りを中心に行います。生徒がそれらを言語化しながら、自己の成長や乗り越えるべき課題に気づき、自己肯定感や自己効力感を高めるなど、キャリア発達の促進をねらいとしています。

○ 保護者懇談（年に3回設定）

個別の教育支援計画をもとに重点目標や保護者の意向、期末評価、現場実習評価等、生徒の成長を確認します。さらに、進路説明会及び生徒面談週間での情報を加えて、生徒の進路を考えていきます。

○ 進路説明会（年に3～4回設定）

現場実習に関する説明や最新の就労状況の情報提供とともに、進路指導部職員が必要に応じて保護者と個別に進路に関する面談を行います。保護者に対して、本人の進路に関する意識を啓発し、本人に合った望ましい進路を提供する礎を築くための重要な取組です。

上記の取組のように、年に3回程度という回数を設定し、本人、保護者、教師が時間をかけて話し合い、三者で共通理解を図りながら進めていく点が、本校の進路指導の大きな特徴です。この三つの取組を密接に関連付けることで、過去の生育歴を正確に捉え、現在の本人の希望を確認し指導を進めることで、未来の進路希望に迫っていきます。

◆特集・実践 高等養護学校・高等支援学校の取組◆

第 回生徒面談週間 記録シート 実施日時 月 日 ( ) 時 分～ 時 分 生徒氏名 _____ 担当者 _____							
<p><b>【全学年共通】</b></p> <p>①生徒が、現段階で考えている目標（がんばりたいこと、挑戦したいこと）</p> <p>→これまでの頑張っている面や伸びた部分、本人の良さなどプラスの評価でフィードバックし、自己理解が深まるような働きかけをしてください（2、3年生）</p> <p>→楽しかったこと、これからの抱負や楽しみにしていること、不安や悩みなどに触れながら、一箇別の教育支援計画の「本人の意向」との関連性も求めて</p> <p>→その背景となる理由などを可能な限り把握してください。</p>							
<p>＜記録＞</p> <p><input type="checkbox"/>卒業後の自分(個別の教育支援計画より)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事をしたい。</li> <li>・一人で買い物ができるようになりたい。</li> <li>→仕事については、ケンタッキーフライドチキンで働きたいと話す(1年時と同じ)</li> <li>実習などで、色々な仕事をしてみましようと思え、納得する。</li> </ul> <p>卒業後のために身につけたいこと、がんばりたいこと</p> <p>作業(集中する)、バスの乗り方(地下鉄も)、外国語(理由は不明)</p> <p>「おつかいに行ってます」</p> <p>近所のスーパーにおつかいに行き、1～2品、保護者に頼まれたものを買っているよう。</p> <p><input type="checkbox"/>今年一年間の自分(個別の指導計画より)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強をもっとがんばりたい →色々な学習に楽しく参加するように助言。</li> <li>・糸のこを上手にできるようにになりたい</li> <li>・友達と話をしたい</li> <li>・スケートをしたい →日ごろから、体育で休まずに走ったり、部活を休まないようにするよう助言。</li> </ul> <p><input type="checkbox"/>一番がんばらなくてはならないこと</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・着替えを早くできるようにがんばります。</li> </ul> <p>目標に遅れがしたが、その意識は少ない。今後、宿泊研修や見学旅行など、時間を意識しての行動が大切な場面があることを伝えた。</p>	<p>②生徒が、過去の生活・将来の生活、及び学校生活・家庭生活・地域生活などについて、現在考えたり感じたりしていること(「楽しみ」「興味・関心」「嫌い」「不安」「悩み」「課題」など)</p> <p>→具体的な内容は、事前の情報や、生徒の状況、話しの流れに応じて各担任の先生でご判断していただいてかまいません。</p> <p>→内容によっては、その背景となる理由などを可能な限り把握してください。</p>						
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20px;">回答に必要な手立て</td> <td style="width: 80%;"></td> </tr> <tr> <td>保護者からの補足</td> <td></td> </tr> </table>	回答に必要な手立て		保護者からの補足		<p>＜記録＞</p> <p><input type="checkbox"/>1年生でがんばれたこと</p> <p>部活、現場実習、あいさつ</p> <p>→現場実習は、大きい達成感を持っている。</p> <p><input type="checkbox"/>先生に手伝ってほしいこと、力になってほしいこと</p> <p>・給食を少なくしてほしい。おなかが出るから。</p>		
回答に必要な手立て							
保護者からの補足							
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20px;">回答に必要な手立て</td> <td style="width: 80%;"></td> </tr> <tr> <td>保護者からの補足</td> <td></td> </tr> </table>	回答に必要な手立て		保護者からの補足		<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 20px;">その他</td> <td style="width: 80%;"></td> </tr> </table>	その他	
回答に必要な手立て							
保護者からの補足							
その他							

図7 生徒面談週間 記録シート

(3) 専門機関へのつなぎと連携

一般就労をする生徒については、卒業前に札幌市内の専門機関である、就業・生活支援センターにつながっています。生徒の進路先が決まった直後に、札幌市内の就業・生活支援センターの職員が来校し、これからつながる生徒の授業見学と、本人及びHR担任との面談を行います。これにより、生徒の状態の把握と情報交換、共通理解を図ります。このように、一般就労をする生徒へは、将来困ったときに自ら支援機関につながるような環境設定を在学中に行います。

(4) 新たな取組

最後に、札幌市では、福祉的就労をする際に「サービス等利用計画」作成に関わる計画相談が、今年の3年生から全員対象になります。今後、本校としては、個別の移行支援計画を含んだ個別の教育支援計画を基礎資料として保護者に渡し、計画相談の際に相談支援事業所へ持参してもらう予定です。3年生は、11月から始まる計画相談を視野に入れて、個別の移行支援計画(個別の教育支援計画)の記入及び、保護者との確認までの準備を進めています。

以上、(1)から(4)までが、在学中の主な就労移行支援の取組です。これらの取組を通して、本人、保護者、教師と一緒に考え、一緒に取り組む姿勢を大切にしながら、本人が適切に進路選択をできることを目指しています。

### 3 卒業後の就労移行支援

#### (1) 訪問支援

卒業後3年間の訪問支援は、職場（事業所）に訪問し卒業生本人の様子を見学することで、本人が職場に適応できているか、本人を支援する環境があるか、職場が本人支援で抱えている悩み等の現況を把握します。また、職場へは、必要に応じて本人理解や支援に関するアドバイスを行います。訪問支援は、先輩方の活躍、職場で必要な力等を在校生や教職員に伝え、あらゆる指導場面にフィードバックできる重要な支援です。

#### (2) 招集支援

本校の同窓会「いなほくらぶ」は、他校の取組と同様に、学校でのレクリエーションや行事への参加、札幌市中心部の娯楽施設でのボーリングやカラオケ、学校祭への参加等の活動を行っています。引率教員は、生徒の話（悩み）に耳を傾けることを意識しながら、みんなで再会の場を楽しんでいます。卒業生の参加率は高く、活発に活動しています。

#### (3) 文書支援

卒業生には定期的に「いなほだより」を郵送し、学校行事や「いなほくらぶ」の様子等を発信しています。

以上のように本校では、就労移行支援を、在学3年間及び卒業後3年間の計6年間に基本を置いて指導をしています。4年目以降は、卒業生や職場のニーズに応じて、可能な範囲で柔軟に対応していく予定です。

### 4 おわりに

これまで紹介した本校の就労移行支援の取組は、特に目新しいものではなく、他の高等支援学校でも取り組まれている内容であると思います。しかし、これらの取組の意味や価値、重みを、再度キャリア教育の視点で見直し、意図をもって適切に関連付けることで、生徒が自らの進路を主体的に考え、自己実現を図る学習の効果が増すのではないかと考えます。その結果、生徒が卒業後に、社会人として自己有用感や自己効力感をもちながら、地域社会に参加・貢献する人間を育てることができると考えます。高等支援学校の卒業は、小学校からの通算12年の学生生活の出口であると同時に、社会人としての入口でもあります。就労移行支援のゴールは、進路先の決定に設定することではありません。特別な教育的ニーズのある生徒が、地域と共に利益を享受しながら生きていけるような環境を、可能な限り設定してあげることが、高等支援学校の就労移行支援の重要な役割であると考えます。

2014年1月、障害者の権利に関する条約が我が国でも批准され、今後一層の「合理的配慮」や「ユニバーサルデザイン」への関心の高まりが予想されます。特別な教育的ニーズのある生徒が、卒業後に働くことを通して社会に貢献し、地域と共に生きていくためには、本人を取り巻く教育、福祉、労働の各機関が連携を図り、それぞれの専門性を発揮し、本人を支援していく必要があります。高等支援学校である本校は、今後も教育機関としての就労移行支援の在り方を模索し、共生社会の実現を目指すよう努力していきます。

## 北海道立特別支援教育センターからのお知らせ

# Webページとメールマガジンのご案内

北海道立特別支援教育センターでは、Webページにより特別支援教育の最新情報やセンターからのお知らせ、研修資料等を発信しています。ホットニュースを毎日更新し、文部科学省や北海道教育委員会からの情報や道内特別支援学校の取組、道内で開催される研修会の案内等を掲載しています。特別支援教育に関する情報収集にぜひご活用ください。

Webページへの学校公開や見学会、研修会等の案内の掲載依頼を随時受け付けていますので、情報発信にもご活用ください。（お問合せ先：011-612-6327 広報啓発事業担当）

The screenshot shows the homepage of the Hokkaido Special Support Education Center. The main header features the center's name and a navigation menu with items like 'トップページ', '相談', '研修', '資料・刊行物', '道内の特別支援学校', '入札情報', and 'アクセス'. Below the header, there are sections for 'お知らせ' (News), 'メールマガジン' (Email Magazine), '研修に関する情報' (Information about training), and '教育相談' (Educational consultation). Callout boxes provide the following details:

- 必要な情報に直接アクセスできます。** (You can access necessary information directly.)
- 電話相談を受け付けています。** (We accept telephone consultations.)
- メールマガジン「とくとくマガジン」への登録ができます。 ※詳しくは次のページへ** (You can register for the 'Tokutoku Magazine' email magazine. For more details, see the next page.)
- メニューに、重要な情報をまとめました。特別支援教育に関する情報についてお届けします。** (We have summarized important information in the menu. We will provide information about special support education.)
- 研修に関する情報はこちらです。** (Information about training is here.)
- 特センからのお知らせをトップページに掲載しています。** (We post notices from the center on the top page.)
- 「ホットニュース」を毎日更新しています。特別支援教育や当センターの最新情報をお届けします。** (We update 'Hot News' daily. We provide the latest information on special support education and the center.)
- Webページから、自主的講座、公開講義、マイプラン研修の申込みができます。** (You can apply for voluntary lectures, public lectures, and My Plan training from the website.)
- 教育相談に関する情報はこちらです。** (Information about educational consultation is here.)

アドレス  
<http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/>  
 検索からは→ 特別支援教育センター

特別支援教育センター

検索

北海道立特別支援教育センターメールマガジン「とくとくマガジン」では、北海道内外の特別支援教育に関する最新情報や当センターの研修、教育相談、刊行物等のお知らせを紹介しています。

月に一度のペースで登録していただいている方にお届けしていますので、皆様の特センメルマガ「とくとくマガジン」への登録をお待ちしています。

●▲●▲●▲●▲●▲●▲●▲●▲●▲●▲

北海道立特別支援教育センター  
メールマガジン  
とくとくマガジン 第22号  
平成28年9月17日(水)

●▲●▲●▲●▲●▲●▲●▲●▲●▲●▲

☆ 目次

【1】はじめに  
【2】特別支援学校作品展のご案内  
【3】「平成27年度公立特別支援学校配置計画」について  
【4】文部科学省「早期からの教育相談・支援体制構築事業(概要)」について

■□-----■□

【1】はじめに

9月に入りまして、ここ札幌ではめっきりと涼しくなり、秋が心地よい季節となりました。皆様、お変わりなくお過ごしですか。今号の「とくとくマガジン」では、「特別支援学校作品展『平成27年度公立特別支援学校配置計画』について」、「文部科学省「早期からの教育相談・支援体制構築事業(概要)」について」

■□-----■□

【2】特別支援学校作品展のご案内

9月18日(火)～9月30日(火)の期間、北海道立生涯学習推進センター2・7・9階「情報交流広場(まなびの広場)展」にお

■□-----■□

【4】文部科学省「早期からの教育相談・支援体制構築事業(概要)」について

文部科学省Webページに、「早期からの教育相談・支援体制構築事業(概要)」が掲載されています。北海道教育委員会や推進地域(美瑛町)における取組をはじめ、全国各地域での取組の報告書が掲載されています。ご活用ください。

○ 文部科学省「早期からの教育相談・支援体制構築事業(概要)」は → [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/main/008/h25/1351720.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/008/h25/1351720.htm)

■□-----■□

◆飛行

北海道立特別支援教育センター  
〒064-0944  
札幌市中央区山西町2丁目1番1号  
TEL 011-612-6211

◆お問い合わせ  
tokucen@hokkaido-c.ed.jp

◆登録変更・中止は  
→ [http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/?page\\_id=61](http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=61)

■□-----■□

## 「とくとくマガジン」登録の手順

「とくとくマガジン登録フォーム」へ必要事項を入力し、登録ボタンをクリックしてください。

「とくとくマガジン登録フォーム」ボタンをクリックします。

【「とくとくマガジン」登録QRコード】



## 編集後記

今年度の「特別支援教育ほっかいどう」は、特別な教育的ニーズのある子どもの就学前から卒業後までを通じて社会参加・貢献に向けた効果的な取組という観点から、各学校や地域の取組を紹介しています。

今回は、高等学校、特別支援学校高等部、高等養護学校（高等支援学校）の取組から、キャリア教育の視点を生かした社会自立・貢献を見据えた就労移行支援の実践や共生社会の形成を目指した特別支援教育の取組を学ぶことができました。

「特別支援教育ほっかいどう」20号は、3期に分けて発行しています。次回は、学校卒業後の特別な教育的ニーズのある方々の社会自立・貢献に取り組んでいる実践を紹介する予定です。これらの取組を参考にいただき、読者の皆さんの教育実践の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、玉稿をいただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

### お知らせ

当センターでは、メールマガジンを定期的に発行しております。御希望される方は、当センターWebページから登録いただきますようお願いいたします。

## 特別支援教育ほっかいどう20号(2)

発行：平成26年12月

編集：北海道立特別支援教育センター

〒064-0944 北海道札幌市中央区円山西町2丁目1番1号

電話 011-612-6211（代表） F A X 011-612-6213

E-mail tokucen@hokkaido-c.ed.jp

URL <http://www.tokucen.hokkaido-c.ed.jp/>

発行者：北海道立特別支援教育センター 所長 木村 宣孝